語彙場の方法[1]

――成分分析と辞書記述――

橋　本　健　一

1．語彙場（lexical field）

言語学で，語彙場という概念が登場したのは，Trier（1931）あたりからで，これは，ドイツ語の悟性分野の語彙の発展（“die Entwicklung deutscher Verstandesworte[2]”）を扱ったものであった[3]。Trier（1931）の冒頭で，トリーアは「発せられた語は，話し手および聞き手の意識において，その音声上の孤立性から結論されるほどばらばらのものではない。発せられたどの語もそれに対立する意味を響かせるのだ[4]。」と述べている。しかも，「ある語を発する際に奔出する概念関係の全体において，対立的意味の関係は単にその一つにすぎず，しかも最重要のものではない。それに近接し，あるいはそれを越えて，発せられたことばに遠近さまざまに近隣している豊富な他のことばがある。[5]」「それが語の概念関係である。それらは相互に，また発せられたことばと，一つの分節された全体，融合を形成するが，これを語場あるいは言語の記号場と名づけることができよう。[6]」

それ以来，この方法は主として意味論の分野で議論され，発展してきた。語彙場について議論された共通の問題点として，以下の３点を挙げることができる。

①語彙場は，複数の語彙項目によって余りなく分割されるか[7]。

②与えられた言語の語彙の総体が，有限数の語彙場に余りなく分割されるか[8]。

③これらの場の存在が母語話者の認識・世界観に影響を与えているかどうか。

本稿では，上記①の問いかけに対しては肯定する立場を取る。②の問いに対しては，現時点で一番適切な答えは「分らない」あるいは「肯定，否定のどちらとも証明されていない」であろう。この問いかけにこだわることは，あまり生産的でない。文明世界の一言語当たり数十万に上ると考えられる語彙のすべてについて，場への参入が証明し尽くされるものではない。必要なのは，コアとなる重要な語彙場を設定することであって，相互に対立しながら一つの意味領域を余りなく分割し，全体として，語彙の小体系を作っている語彙項目の小グループの設定を積み重ねてゆくことである。

③の問いに対しては，仮定的に肯定の立場をとる。これを否定する有力な根拠が，演繹的にも帰納的にも見つかっていないと考えるからである。この問題は，「サピア・ウォーフの仮説」にまで行きつく(9)。

近時，語彙場についての関心は，依然として衰えていない。Sylvester (1994) では，*Oxford English Dictionary* の語義記述と，*Roget's Thesaurus of English Words and Phrases* の分類を出発点として，トリーアの語彙場（意味場）の方法と，成分分析の方法とを組み合せつつ，「予期」(EXPECTATION) の語彙場の歴史的な構築が試みられている。Backhouse (1994) では，日本語の味覚の語彙項目を対象に，「語彙の意味場」（'lexical semantic field'）が提唱されている(10)。

2．最小の場構造：反意語

単語は，ばらばらにあるのではなく，さまざまな意味関係のネットワークで互いに支えあっている。ここでは，反意の意味関係について観察する。

反意語は通常二つの，意味上対立する単語である。「長い」と「短い」の

ように互いに反対の意味を表している。寸法・尺度を表す形容語句には，このようなペアが多く見られる。「大きい」と「小さい」，「広い」と「狭い」，「厚い」と「薄い」，「太い」と「細い」，「高い」と「低い」，「深い」と「浅い」，「遠い」と「近い」など，など。

反意語の特徴は，二つの単語が，一つの共通の意味カテゴリーを持っていて，その中で，二つの，相反する方向の極が設定され，二つの反意語の意味が，それぞれの極にセットされている，という点にある。二つの極を＜＋＞[11]（プラス極）と＜－＞（マイナス極）で表す。「ながい」は「１次元の尺度でプラス極にある」，「みじかい」は，「１次元の尺度でマイナス極にある」という意味をもっている[12]。反意語は２語が対立している２極の最小語彙システムである。

３．対立の中和：無標形と有標形

橋の長さを人にをたずねるとき，普通，私たちは，「その橋はどれほど長いのですか」のようにいい，「その橋はどれほど短いのですか」とはいわない。「その橋はどれほど長いのですか」では，「長い」は「長さがある」という意味で使われていて，「その橋が長い」と決まっているわけではない。この場合の「長い」では，＜＋＞と＜－＞の対立が中和されている。

「長い」のように，マイナス極に対立するプラス極の意味と，中和された意味の両方で使われる語を「無標形」（unmarked form）と呼び，それに対して，「短い」のような語を「有標形」（marked form）と呼んでいる。通常，プラス極＜＋＞を表す単語が，対立を中和した意味を表す単語としても使われる。

これを図１で示す。図中の上枠の「ながい」は，「ながい」と「みじかい」の意味的中和を具現する語であり，「ながさがある」を意味し，下の左側，短い枠の中の「ながい」は，「みじかい」に対立する。これは最小形態の語彙場である。

【図１】

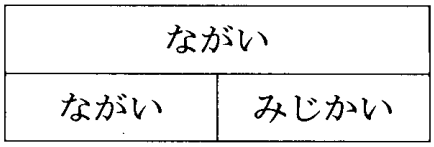

図１で分るように，語彙場の伝統的な形式では意味要素を表示しない[13]。場を構成する語彙項目と，場全体を代表する語彙項目あるいは表現を表記するだけである。

図１と同じ内容を表すのに，図２のような表記上の変種もある。

【図２】

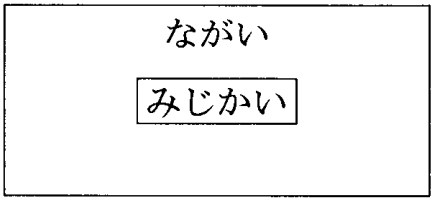

図３は，図１に意味要素を加えて図示したものである。＜次元＞は，次元に関わる語彙項目に共通の意味要素であり，特に＜意味領域＞として示した。＜次元数＞と＜空間特性＞は，意味要素である。＜有標性＞と＜極性＞は，言語の普遍的な特性の集合に属し，意味論においても最初からメタ言語に入っていると考えてよいが，ここでは意味要素に入れておく。意味要素は，成分分析（componential analysis）の方法によって抽出される。語彙場の表示を成分分析の手法によって補強し，ある語彙場の共有する意味領域，および場の内部における意味上の対立関係を明示する必要があり[14]，さらに，認知意味論の成果をも取り入れてゆくべきであろう[15]。図１にあった「長さがある」の意の，中和語「ながい」は，＜＋極＞の「ながい」のもつ無標性表示＜－＞によって「ながい」が中和語としても使われることが明らかであるので，図３では表示しない。

【図３】

＜意味領域＞		＜次元＞	
意味要素	＜次元数＞	＜１＞	
	＜空間特性＞	＜線状＞	
	＜極性＞	＜＋＞	＜－＞
	＜有標性＞	＜－＞	＜＋＞
語彙		ながい	みじかい

４．下位の語彙場から上位の語彙場へ

「長い」と「短い」の語彙場は，他の反意語の対が構成する２次元，３次元に関わる形容詞の語彙場と組み合わされて，より高次の＜次元＞の語彙場を構成する(16)。

２次元の尺度形容詞は，基本的に言って，「広い」，「狭い」の一対である。図４は，意味要素を示さない簡単な表示である。

【図４】

ひろい	
ひろい	せまい

図５では，成分分析の手法で意味領域と意味要素を設定する。

【図５】

＜意味領域＞		＜次元＞	
意味要素	＜次元数＞	＜２＞	
	＜空間特性＞	＜面積＞	
	＜極性＞	＜＋＞	＜－＞
	＜有標性＞	＜－＞	＜＋＞
語彙項目		ひろい	せまい

さらに，①「高い」と「低い」，②「深い」と「浅い」，③「遠い」と「近い」の三つのペアを観察することにする。これらは，三組とも３次元世界の中の＜距離＞に関わる極性形容詞で，３組は＜方向＞の意味要素によって区別される。①は，観察者が立つ地平よりも上方の垂直方向で計り，②は，観察者の地平よりも下方の垂直方向で計り，③は，水平方向で計る。

この３組６語の反意語を意味要素に分解して示すと，図６のようになる。枠の中の斜線／は，その意味要素が無関係であることを示す。

【図６】

<table>
<tr><td colspan="2">意味領域</td><td colspan="6">＜次元＞</td></tr>
<tr><td rowspan="7">意味要素</td><td>＜次元数＞</td><td colspan="6">＜３＞</td></tr>
<tr><td>＜空間特性＞</td><td colspan="6">＜距離＞</td></tr>
<tr><td>＜方向性＞</td><td colspan="6">＜＋＞</td></tr>
<tr><td>＜垂直性＞</td><td colspan="4">＜＋＞</td><td colspan="2">＜－＞</td></tr>
<tr><td>＜上方性＞</td><td colspan="2">＜＋＞</td><td colspan="2">＜－＞</td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td>＜極性＞</td><td>＜＋＞</td><td>＜－＞</td><td>＜＋＞</td><td>＜－＞</td><td>＜＋＞</td><td>＜－＞</td></tr>
<tr><td>＜有標性＞</td><td>＜－＞</td><td>＜＋＞</td><td>＜－＞</td><td>＜＋＞</td><td>＜－＞</td><td>＜＋＞</td></tr>
<tr><td colspan="2">語彙項目</td><td>たかい</td><td>ひくい</td><td>ふかい</td><td>あさい</td><td>とおい</td><td>ちかい</td></tr>
</table>

「高い」と「低い」，「深い」と「浅い」，「遠い」と「近い」が構成する反意語の３組は，それぞれ最小サイズの語彙場を形成し，三つが全体として，私たちが３次元世界の中で，ある地点から地点へのへだたりについて述べ，あるいは考えるときに使う意味領域＜距離＞の語彙場を形成している。

次に，「大きい」と「小さい」，「厚い」と「薄い」，「太い」と「細い」の３組も，それぞれ最小の語彙場をつくっている。これらは３次元の尺度形容詞で，「大きい」と「小さい」は，物体の縦・横・高さの３方向の総和について，「厚い」と「薄い」は縦・横に比して高さの小さいものについて，「太い」と「細い」は縦・横に比して長さの際立つものについて使われる。「長さ」は，＜方向＞の限定がない語で，垂直方向に限定される「高さ」と

対照的である。

図７の＜空間特性＞の，＜縦×横×高さ＞は，「横と縦と高さの総合」を表し，＜高さ＜縦∨横＞は，「高さが，縦と横よりも小さい」を表し，＜長さ＞縦∨横＞は，「長さが縦と横よりも大きい」を表す。

【図７】

意味領域		＜次元＞					
共通意味要素	＜次元数＞	＜３＞					
	＜空間特性＞	＜縦×横×高さ＞		＜高さ＜縦∨横＞		＜長さ＞縦∨横＞	
	＜極性＞	＜＋＞	＜－＞	＜＋＞	＜－＞	＜＋＞	＜－＞
	＜有標性＞	＜－＞	＜＋＞	＜－＞	＜＋＞	＜－＞	＜＋＞
語彙項目		おおきい	ちいさい	あつい	うすい	ふとい	ほそい

図３，図５，図６，図７を合わせると，図８のような次元形容詞の語彙場が形成される。

【図８】

意味領域		＜次元＞															
共通意味要素	＜次元数＞	＜１＞		＜２＞		＜３＞											
	＜空間特性＞	＜線状＞		＜面積＞		＜距離＞						＜縦×横×高さ＞		＜高さ＜縦∨横＞		＜長さ＞縦∨横＞	
	関連次元数	＜１＞		＜２＞		＜１＞						＜３＞					
	＜方向性＞	＜－＞				＜＋＞						＜－＞					
	＜垂直性＞					＜＋＞				＜－＞							
	＜上方性＞					＜＋＞		＜－＞									
語彙項目		ながい	みじかい	ひろい	せまい	たかい	ひくい	ふかい	あさい	とおい	ちかい	おおきい	ちいさい	あつい	うすい	ふとい	ほそい

図８では，下位に位置する小さな語彙場が組み合わさって，より上位に

位置する比較的大きな語彙場を構成して行くことが示されている。

5．辞書記述と語彙場

語彙場の設定に語彙項目の意味分析が重要であることを3節，4節で見た。語義の記述の中でもっとも伝統的なものは，辞書における定義である。*Concise Oxford Dictionary* 第8版（以下 COD 8 と略記）を開いてみる。

(1) tree: a perennial plant with a woody self-supporting main stem or trunk when mature and usually unbranched for some distance above the ground.（COD 8）（成木時には木質のしっかりした主幹をもち，通常，地面から若干離れて分枝する多年生の植物。）

(2) shrub: a woody plant smaller than a tree and having a very short stem with branches near the ground.（ibid.）（木よりも小さくて幹が短く，地面近くで分枝する木本の植物。）

(3) grass: a vegetation belonging to a small group of of small plants with green blades that are eaten by cattle, horses, sheep, etc. (ibid.)（牛，馬，羊などが食む，緑色の葉身をもつ一群の小型の植物）

(4) herb: any non-woody seed-bearing plant which dies down to the ground after flowering. (ibid.)（開花後，地面に倒れて枯死する，非木質の結実性の植物）

tree と shrub の差異は，日本語の，やや専門的な「喬木」，「潅木」に相当することが分る。日本語の日常語彙では，この二つを合わせて「き」と呼んでいる。逆に，英語の日常語彙には，我々の「き」にあたる単語がない。

grass と herb の差異は，日本語の語彙では区別されていない。両方とも，「くさ」である。（herb には，別に，「薬草」の意があるが，ここでは扱わ

ない。）grassは，硬い，まっすぐな葉をもつイネや芝草の仲間で，herbは，やわらかな葉をもつ草の仲間である。

もう一つ，forbという単語がある。*Oxford English Dictionary*（第2版）の定義を引用する。

(5) forb: a herbaceous plant of a kind other than grass: applied chiefly to any broad-leaved herbs growing naturally on grassland.（grass以外の草本の植物：主として，草地に自生する広葉のherbの仲間を指して使う。）

これこそ「やわらかい広葉の草」で，grassとはっきり対立している。ところが，forbという語は，手元のCOD 8にも，*The Shorter Oxford Dictionary*にも，*Longman Dictionary of Contemporary English*（1967版）にも，*Oxford Advanced Learner's Dictionary*（第4版）にも載っていない。OEDでようやく見つかった。アメリカの中辞典には記載されているのに，である。

(6) forb: any herbaceous plant that is not a grass or not grasslike. (*Random House Webster's College Dictionary*)（grass以外の，あるいはgrassらしくない草本植物）

イギリス英語では「grass ＋ herb」が，アメリカ英語では「grass ＋ forb」が，我々の「くさ」に相当していると考えられる。逆にいえば，イギリス英語でもアメリカ英語でも，「くさ」に相当する日常的な単語はないのである。

我々は，植物全部ををひっくるめて「草木」といっている。「草木も眠る丑みつどき」。「くさ」といったら，草本の植物すべてを含み，「き」といっ

たら，木本の植物すべてを含んでいる。漢語で「山川草木」といえば，植物に満ちたこの世界全体を表す。

英語には，「くさき」に相当する表現があるだろうか。animal に対する plant があるが，これは要するに「植物」である。vegetation があるが，少し文語的で，「くさき」ほど親しみやすくないようである。

COD 8 の記述を手がかりに，成分分析の手法を取りいれて，tree，shrub，grass，herb を構成項目とする＜植物＞の語彙場（図 9）を設定する(17)。

【図 9】英語の植物界の語彙場

plants			
＜＋ woody ＞		＜－ woody ＞	
＜＋ a long trunk ＞	＜－ a long trunk ＞	＜－ long leaves ＞	＜＋ long leaves ＞
tree	shrub	herb/forb	grass

日本語の植物界の語彙については，図10のような場構造を想定できる。英語との対比を明らかにするために，意味要素を英語で表示する。木質か，木質でないかによって草と木が区別されている。

【図10】日本語の植物界の語彙場

上位語	くさき／植物	
意味要素	＜＋ woody ＞	＜－ woody ＞
語彙項目	き	くさ

図 9 と図10を比べると，植物界のとらえ方の，英語と日本語の間の差異がよく分る。なぜ違うのかという問いは，認知の問題で，ここでの検討範囲には入らないが，例えば，grass と herb/forb の区別は，ヨーロッパの民族の遊牧・牧畜の伝統と結びつくのかもしれない。

6．おわりに

以上，語彙場理論の発展の方向を，下位から上位への場設定の重要性，成分分析・辞書記述の重視という点から論じ，若干の語彙場を提示した。1931年に始まった語彙場の研究が今でも盛んに行なわれているという事実は，この理論の発想が基本的に健全であり，設定の方法論を改善することによって更なる実りをもたらす力があることを示していると考える。

注：

(1) この論文は，1999年10月16日に行われた本学公開講座，橋本健一「日常生活の意味論―ことばに支配されずに，ことばを活用する法―」の発表原稿の一部を基礎として発展させたものである。

(2) Hoberg (1970), 59.

(3) 1200年頃からの悟性の語彙を扱い，Wîsheit（知恵），Kunst（芸術），List（技巧）の意味および相互間の意味関係と，それ以後このグループ内に生じた語の交代が意味するものを中心に論じている。cf. Guiraud (1969), 77-79.（Wîsheit, Kunst, List の和訳は，ギロー著・佐藤信夫訳（1967）によっている。）

(4) Kein ausgesprochenes Wort steht im Bewusstsein des Sprechers und Hörers so vereinzelt da, wie man aus seiner lautlichen Vereinsamung schliessen könnte. Jedes ausgesprochene Wort lässt seinen Gegensinn anklingen. (Trier (1931), 1)

(5) "In der Gesamtheit der beim Aussprechen eines Wortes sich empordrängenden begrifflichen Beziehungen ist die des Gegensinns nur eine und gar nicht die wichtigste." (ibid.)

(6) Es sind seine Begriffsverwandten. Sie bilden unter sich und mit dem ausgesprochenen Wort ein gegliedertes Ganzes, ein Gefüge, das man Wortfeld oder sprachliches Zeichenfeld nennen kann. (ibid.) Wortfeld「語場」（あるいは「語彙場」）という用語が，その概念とともに明確に提示されている。英語訳は，lexical field，本稿では，「語彙場」としておく。概念を中心に考えるときには，トリーアは Begriffsfeld（概念場）という用語を使っている。この分野では，「言語場」（linguistic field），「意味場」（semantic field）も用いられる。

(7) 語彙項目（lexical item）は，単語，形態素，成句から成る。隙間だらけの語彙場の存在が多数証明されたら，言語理論における場の理論にとって致命的となる。「隙間のある場」は少数の事例にとどまると仮定しておこう。例えば，

Lehrer (1974) は，色彩の語彙場の一つとして，上位語 brown の下に，tan（淡褐色），beige（うすい鳶色），cocoa（こげ茶色）を設定しているが，これで brown の意味領域が余りなく分割されたと言えるかどうか。日本語の「あか」の場の構成語としての「くれない」，「べに」，「えんじ」，「緋」，「朱」などは如何に。単に「あか」と呼ぶしかない「隙間」が残るかもしれない。

(8) トリーア自身は，隙間のない全語彙の体系を構想していた。"Und dass wir genau wissen, was mit ihm gemeint ist, legt gerade an diesem Sichabheben von den Nachbarn und diesem Sicheinordnen in die Ganzheit der den Begriffsbezirk überlagernden Wortdecke, des lückenlosen Zeichenmantels."「発せられた語がなにを意味しているかをわれわれがよく知っているのは，隣接のさまざまの語からの分離対照と，概念域を覆う語の外被，隙間のない記号被覆の全体の中への組み入れによっている。」(Trier (1931), 2)

(9) " It (=the theory of semantic fields) also involves the idea that a language is organized according to the world view of the particular nation or culture which speaks it and is their attempt to analyse their experience. (Sylvester (1994), 21)

(10) "...the meaning of an item of the vocabulary is seen as being specifiable in terms of the various types of intralinguistic semantic relations..." (Backhouse (1994), 19)（省略　橋本）

(11) カッコ＜ ＞は，語彙項目と区別されたものとしての意味要素を表す。

(12) このような反意語は，「反対語」(contrary terms) と呼ばれ，他のタイプの反意語と区別される。cf. *Webster's New Dictionary of Synonyms* (1968).

(13) cf. Guiraud (1969), 78; Geckeler (1971), 180, 196.

(14) cf. Backhouse (1994), 10, 21.

(15) Gordon and Sadler (1999)：507－508には，コンピュータを使った空間関係語彙の図解があり，語彙場理論，成分分析，認知意味論が結びつく可能性を示している。

(16) 次元空間の語彙は，意味論でポピュラーな研究テーマの一つである。
cf. Greimas, A. -J. (1966), 35.

(17) 図９の＜＋ a long trunk ＞，＜－ a long trunk ＞，＜－ long leaves ＞，＜＋ long leaves ＞は，仮の意味要素である。もっと効果的な成分分析があるかもしれない。

参考書目

Backhouse, A. E. (1994). *The Lexical Field of Taste: A Semantic Study of Japanese Taste Terms*. Cambridge University Press, Cambridge.

Bloom, P, Peterson, M. A., Nadel, L., and Garrettt, M. F. eds. (1994). *Language and Space*. M. I. T. Press, Massachusetts.

Geckeler, H. (1971). *Strukturelle Semantik und Wortfeldtheorie*. Wilhelm Fink Verlag, München.

Gordon, D. L. & D. D. Sadler (1999). "A Computational Analysis of the Apprehension of Spatial Relations," in Bloom, P, Peterson, M. A., Nadel, L., and Garrettt, M. F. eds. (1994), 493-529.

Greimas, A.-J. (1966). *Sémantique Structurale: Recherche de Méthode*. Larousse, Paris.

Guiraud, P. (1969). *La Sémantique*. 《QUE SAIS JE?》 Presses Universitaires de France, Paris.

ピエール・ギロー著・佐信夫訳『意味論――ことばの意味――』(文庫クセジュ) 白水社, 1967.

Hoberg, R. (1970). *Die Lehre vom Sprachlichen Feld: Ein Beitrag zu ihrer Geschichte, Methodik und Anwendung*. Schwann, Düsseldorf.

Lehrer, A. J. (1974). *Semantic Fields and Lexical Structure*. North Holland, Netherlands.

Sylvester, L. (1994). *Studies in the Lexical Field of Expectation*. Rodopi, Amsterdam-Atlanta, GA.

Trier, J. (1931). *Der Deutsche Wortschatz im Sinnbezirk des Verstanndes: Von den Anfängen bis zum Beginn des 13. Jahrhunderts*. Carl Winter, Heiderberg. 1973.